

## カオハガン研修での学び

人間福祉学部 地域福祉学科 4年

私は、今回の研修が初めての海外だったため、行く前は不安が大きかった。しかし、カオハガン島の人々の温かさや優しさに触れたり、私が最初に考えていた島の人々の生活の様子とは異なるものを知れたりして、とても有意義な時間を過ごすことができた。

研修前に、カオハガン島で使われているビサヤ語と英語を学ぶ機会があったが、私は英語が苦手でほとんど話せず、ビサヤ語も挨拶と少しの単語しか覚えきれなかったため、島の人々ときちんとコミュニケーションが取れる自信がなかった。島に到着し、杉浦佑子さんからのオリエンテーションが終わった後、島の中を散策していると、島の子どもたちに会ったが、話せる自信のなかった私は何を話したらいいか戸惑ってしまった。しかし、子どもたちの方から英語で「名前は？」と話しかけてきてくれたり、咲いている花をとってきてプレゼントしてくれた。初めて会ったばかりなのに、まるで知り合いのように接してくれて、子どもたちとすぐ打ち解けることができた。子どもたちだけでなく、島の人々皆が知り合いのように話しかけてくれて、コミュニケーションが取れなかったらどうしようといった私の不安はすぐに消えた。言葉で上手くコミュニケーションをとることばかり考えていたが、言葉がたくさん話せなくても、ちょっとした挨拶や、関わりを通してコミュニケーションが取れるということが分かった。大切なのは、相手を知りたいという気持ちと、自分のことを伝えたいという気持ちであると学んだ。

島に来て3日目に小学校訪問を行い、島の小学生と万華鏡作りと手つなぎ鬼をした。万華鏡は日本ではしられているが、島の子どもたちが楽しめるかどうか不安だった。しかし、教室に入った時から子どもたちがとても喜んでくれて、すごく嬉しかった。英語と画用紙に描いたイラストで作り方を説明しながらみんなで作ったが、楽しんで作ってくれたのではないかと思う。出来上がった万華鏡で、島の植物や海を見たが、とてもきれいで感動した。研修前に何度も万華鏡の改良をしてよかったと思った。

手つなぎ鬼はルールを説明したが、あまり伝わらなかったのか途中から違う遊びになってしまった。島の子どもたちが普段行っている遊びをやったが、私も久しぶりに思い切り体を動かすことができたし、子どもたちが楽しんでくれて安心した。

島で生活をしてみて、日本ではできないであろう体験をすることができ、今までどれだけ自分が水をたくさんつかっていたか知ることができた。カオハガン島では水がとても貴重で、雨水を溜めて飲み水以外に使っていた。日本で生活していると、つい水を出しっぱなしにしてしまったり、使いすぎてしまったりすることがあったので、もっと水を無駄使わず大切に使うことができた。ココナッツオイル作りも体験したが、オイルはたくさんあるココナッツからも少量しかとれない貴重なものだと知った。島の人々は、限りある資源を大切に使い、壊れたものは自分たちで直したりしていた。わたしは、壊れてしまったものがあっても、直すのが面倒くさいと思って捨ててしまったことがある。しか

し、資源は無限にあるわけではないこと、ものを大切にしなければいけないことを改めて学ぶことができた。

他にも、ボートに乗って釣りをしたり、サンゴ礁保護区を見学しに行った。私は泳ぐのが苦手なため、救命胴衣を着ていても海に潜るのが怖かった。しかし、今入らなければいつ見られるだろうと思い、島の人が貸してくれた浮輪を使って海の中のサンゴ礁を見ることができた。サンゴ礁も泳いでいる魚も、何もかもがきれいだった。朝は波の音や鳥のさえずりで目が覚めたり、潮が引いていたので海を散歩することもできた。母屋での食事もおいしく、とても健康的な生活を送ることができた。日本にいと、私はお腹が空いたら間食をしようと思うが、島では間食をしようと思うことが一度もなかった。朝は空腹で目が覚め、お昼頃になればまた自然とお腹が空いた。携帯電話を気にする必要もなく、まったりと過ごすことができた。日本では時間や携帯電話を気にしすぎることもあるが、島の人々はそのようなことは気にせず、穏やかに生活しているのがとても印象的だった。

また、私が強く衝撃を受けたことは、豚を丸焼きにするのに、生きていた豚をその場で屠殺する場面である。私は、豚を屠殺するところを見ようと思ってはいたが、豚の激しい叫び声に耐え切れず、見るができなかった。この時に見なければきつともう見ることはないと思っていたので、貴重な機会を逃してしまったと後悔している。普段私が食べている肉はやり方は違っても、こうやって人の手で殺されている。わかってはいたけれども、実際にその場面を見るのはつらかった。島では大人だけでなく子どもたちも屠殺するところを見ていたので、幼いころからそういう場面を見てきているからこそ、自然の恵みや食べ物に感謝できるのではないかと感じた。日本にいとどうしても食べ物があることを当たり前のように思ってしまうが、決して当たり前ではないこと、他の命をいただいて自分が生きているということを実感した。

そして、島のオーナーである崎山さんがおっしゃっていたことがとても印象に残った。私の今回の研修の一番の目的は、カオハガン島の高齢者の方々がどのような生活をしているのか知ることである。私は大学で介護の勉強をしており、卒業後は高齢者施設で勤務するため、高齢者の方々の生活について興味があった。そのため、ホームステイ先も高齢者の方がいる家庭を希望した。私は島に行く前、カオハガン島は日本の田舎のようなところで、長生きの高齢者の方々が多いいのではないかと思っていた。しかし、島で高齢者の方々に会うことがほとんどなく、その理由を崎山さんにお聞きした。すると、カオハガン島の人々はあまり長生きしたいとは思っていないとおっしゃっていた。高齢になると、今まで家族と一緒に暮らしていた人も、離れて暮らすようになるらしく、私がホームステイさせていただいた家庭の高齢の女性も、食事は一緒に食べていたが、隣の家で生活していた。その理由の一つとして、高齢になり、介護が必要になると、家族に迷惑をかけるという思いもあるとおっしゃっており、自分の介護のことで家族に迷惑をかけたくないという思いは、日本の高齢者にも共通していると感じた。

また、最近亡くなった高齢者の方についてもお話して下さった。その方は、カオハガ

ン島から少し離れたセブ島で治療をしていたが、島に戻り、家族が自宅で介護をしていた。その方に対する家族のケアは、とても良いものであったと崎山さんはおっしゃっていて、カオハガン島では医療施設や介護施設がないため、介護をするときは家族が一生懸命行っていることを知った。

日本では少子高齢化が進み、いかに健康で長生きできるかに重点が置かれている。また、老後を不安に思っている人も多いのではないかと。しかし、カオハガン島の人々は、先のことを考えたり、あせったりせず、今を楽しんで生きているということを知った。

私は、卒業を目前にして、これから社会人として上手くやっていけるだろうかとか、将来に対する不安があったが、島の人々は将来のことや小さなことでよくよせず、いつも笑顔で毎日を過ごしていた。将来のことなんて、悩んでいても解決しないし、その時になってみなければ分からないことばかりである。これからどうなるんだろうと不安を抱えて過ごすよりも、今日を楽しく、笑顔で過ごせたらそれで良いのではないかと。カオハガン島の人々と出会って、そう考えられるようになった。また、「何もなくて豊かな島」といわれているように、何もないからこそ、周りの人と助け合い生きていかなければいけないと思うし、だからこそ、島の人々は皆が優しく、温かいのではないかと私は思った。

5泊6日の研修期間だったが、時間の流れがゆっくりと感じて、とても心地よく過ごすことができたし、何より日本ではできない体験をたくさんすることができて本当に良かった。今回の研修に参加しなければ、海外に行くことなんてなかったかもしれないし、行ったとしてもただの観光旅行で終わってしまったと思う。参加するかどうか迷っていた時もあったが、思い切って参加してみて良かった。

私は、カオハガン島の人々の食べ物や自然に感謝し、ものを大切にするという生活は、日本の高齢者の方々がしてきた生活と同じなのではないかと思った。カオハガン島の生活を体験できたことは、これから高齢者施設で働く私にとって、利用者を理解することにつながるのではないだろうか。高齢者の方々の生活を理解し、尊重し、その人の大切なもの、大切な人を、私も同じように大切にしていきたいと思う。そして、いつも笑顔を忘れずに、私らしく毎日を過ごしていきたいと思った。